



越境して語り合うー札幌市内の文化施設

佐々木秀彦(アーツカウンシル東京)、松本桜子(札幌文化芸術交流センター SCARTS)、
山崎真実(札幌市博物館活動センター)、浅野隆夫(元札幌市図書・情報館)

報告者：佐々木亨(北海道大学文学研究院)

松本桜子(札幌文化芸術交流センター SCARTS事業係長) 「札幌文化芸術劇場hitaru、札幌文化芸術交流センター SCARTSの取り組み」

これらの施設は、「札幌市民交流プラザ」(2018年開館)を構成する2施設で、公益財団法人札幌市芸術文化財団が指定管理者として運営しています。このほかに札幌市図書・情報館の3施設(札幌市の直営)からプラザは構成されています。

この3施設は同じ建物内にあるにもかかわらず、それぞれの施設の役割や機能を知る機会が当初はありませんでした。そのため、まずお互いを知る機会を作り、前例のないことはできないと思い込んでいたことにあえて挑戦しはじめ、現在では複合文化施設の強みを活かす連携の取り組みを次々と実施しています。また、SCARTSは文化施設ではありますが、物理的な場所や空間ではなく、中間支援という機能を有している点が特徴です。例えば、文化芸術活動に関する日ごろのお悩みについて、寄り添いながら一緒に解決を目指す「相談サービス」には、これまでの多岐にわたる相談が寄せられています。

山崎真実(札幌市博物館活動センター学芸員) 「札幌市博物館活動センターの場合」

このセンターは、1986年から検討が始まった札幌市が新設する自然系博物館にその始まりがあります。バブル崩壊などを受け、1990年代後半にこの計画が一時凍結になりますが、それ以降の推進方針として「市民とのパートナーシップによる博物館づくりを实践する場」を設置することとなりました。その拠点として、2001年に、都心にある旧市立病院の建物を使ってセンターが開設されました。

例えば、「iミュージアムギャラリー」は、この推進方針を实践する事業でした。研究者や大学生サークルと協働で開催した企画展などを実施してきました。また、市民のアイデアから企画された共催事業「科学絵本読み聞かせ&学芸員の井戸端サイエンス」は、2006～2015年まで毎月1回、合計112回開催されたイベントです。しかし、博物館側と市民とが目的を共有・確認しないまま、市民活動が加速して、活動が多様化していきました。このことは一方で、学芸員と管理系スタッフとのコミュニケーション不足により、「場に関する専門性」に注意が払われていなかったことを気づかせてくれました。その後は、行政計画に資す

る客観的な評価軸「System」とともに、個々の博物館職員
の信条や主観の源泉となる「Spirit」の2つを意識しはじめ
ました。

浅野隆夫(札幌市図書・情報館初代館長、現札幌市役所プ ロジェクト担当部長)「越境が司書を育てる」

2018年に「札幌市図書・情報館」が開館しましたが、計画時にまず「いい図書館って、なんだろう？」という問いのもと、スタッフ3人で70箇所の図書館を視察してきました。そこでわかったことは「図書館だけがよくなるということはありません」ということでした。つまり、この街がよくなる、それに図書館が影響を与える関係になることです。当館はビジネス街の真ん中にあるので、「はたらくをらくにする。」をコンセプトに定めました。

図書・情報館では、3つの決断をしています。1つめはWork、Life、Artの3つのジャンルの本しか置いていません。小説や絵本はありません。2つめは、日本十進分類法ではなく、テーマに沿った棚づくりをしています。例えば、Workのビジネススキルの棚では、周辺企業にヒアリングした結果を使って「ハラを立てない方法」「リーダーの心得」といったような棚を作っています。「課題って人のなかで広がっていくんです。だからその課題を本棚で包み込むようにしています」。つまり、「どんなひとがこの本棚の前に立つんだろう」が出发点です。まず本ありきではありません。私は司書に、本棚で自分の「花だん」を創るようにと伝えています。3つめは、本の貸出をしていません。

また、ここでのイベントは場所貸しを認めていません。企画段階から係わります。なぜかという、イベント登壇者の声も大事な街の情報であり、街の骨格を創る人たちとの係わりは、電子図書の利用とは異なり、ダウンロードで

きない価値と捉えているからです。

ディスカッション

松本桜子、山崎真実、浅野隆夫、佐々木秀彦、佐々木亨

はじめに佐々木秀彦さんより、「文化的コモンズ」とは「地域の共同体の誰もが自由に参加できる入会地のような文化的営みの総体」と定義できるとの説明がありました。それが成立するための文化施設のファシリティとして、使命と展望があり、それを実現するための文化資源(コンテンツ)を有していることが基本です。これを社会に提示し、地域とコミュニケーションし、アウトリーチなどのエンゲージメントを行い、社会課題に対応したアクションへと続きます。これらの活動を実施する際に根底を貫くものの、調査研究(リサーチ)と記録(アーカイブ)があります(『文化的コモンズ』p.238)。さらに施設を越境する際のキュレーションの方向として、文化資源を出発点とする「コンテンツ・キュレーション」、社会課題に収斂する「ソーシャル・キュレーション」があること(同書p.264)を力説しました。

その後、3名のパネリストから「文化的コモンズに関してどんなイメージを抱いているか」「それを実現するための課題は何か」に関して発言いただきました。最後に、佐々木秀彦さんから「文化的コモンズ」についてあらためて説明がありました。「これからの文化施設は、サービス・プロバイダーではなく、プラットフォーム・ビルダーになるのではないか。つまり、市民に直接サービスを提供する役割から、公私の組織を問わず新しい協力関係を構築する枠組み(プラットフォーム)をつくる役割になると考えます。そのプラットフォームの1つが「文化的コモンズ」ではないか」と。